

ある弁護士の手記

井本元義

「一」

今までいろいろな事件を手がけてきて気に残ることが多かったが、最近では児童虐待や幼児殺しが報道される度に、とくに心が痛むようになった。世の流れでそれらの事件が増えてきたのか、あるいは私の歳のせいだ感情がもろくなってきたのかも知れない。

最初は加害者への怒りが起こり、幼児である被害者への同情、そして加害者の心理分析、幼児体験で話は収まる。罪を償っても何も変わらない。世の中の日々の怒濤が押し流していく。人々は忘れ、次の事件が起こる。

二十数年前のT子の事件は私が担当した最初のものだった。T子は地方の裕福な、といっても雑貨や呉服を扱う商店の

一人娘だった。両親は物静かな柔和な人で、T子は世間知らずの、ただ夢見がちなお嬢さんだった。二年間だけという両親との約束で彼女は都会に出てきた。短大を卒業すれば必ず帰って、結婚して父の店を継ぐはずだった。素直な性格の彼女に都会は楽しく、一人部屋で過ごす毎日には心躍ることばかりだったが、控えめに過ぎた。しかし一年も経つとある青年と知り合った。彼女の知らないことを次々に教えてくれ、ちよつとした冒険をした後は二人で心から笑いあつた。

妊娠した時、彼女はそんなことが自分の身に起こるとは信じられなかった。そして怖くなった。誰にも告げずに過ごすには体も心も限界があつた。処理するには遅すぎた。両親は驚いて飛んできたが、娘を叱り青年に詰め寄るよりも、むしろ懇願した。娘の将来をよろしく頼む、というのが精いっぱいだった。

子供が生まれて二人は小さな所帯を持った。時々母親が田舎から出てきて赤子と娘の世話をした。両親の仕送りと男のバイト代で生活費は充分だった。いつか二人が父の店を継ぐことになるだろう。

男が家を空けることが多くなつたのは、一年も経たない頃だった。T子は母親には言わなかつた。男は何日も帰らず、彼女はその間中、一人で部屋で過ごした。もう男が帰つてこないという気がしていた。カーテンを閉め切つた部屋は一日中暗く、食事は喉を通らなかつた。ミルクも切れた。T子は幼児の首を絞めた。そうしてまた何日もそのままだった。男への執着と憎しみと不安が彼女の中で渦巻いていた。あとで、

両親が帰って来てくれればよかつたのにと泣いたが、彼女はもう答えなかつた。

私がたまたまその事件を担当した。相手の男は蓮つ葉なつまらない男だつた。罪を問うこともできない相手に私は怒りよりも無視で答えた。T子は憔悴しきつて心を病みつつあつた。裁判の決着はすぐに済んだ。有罪であるのは当然だつたが情状酌量の執行猶予だつた。

そのあとのT子のことは知らない。両親のもとで回復して過去を忘れ去ることが出来たかどうか。それともずっと闇の中で日々を送っているのだろうか。苦悶の果てに自死したということではなければいいと思うが、分からない。

出張先から帰宅したサラリーマンが、留守の妻が子供を殺して自分も死のうとしながらそれも出来ずに苦しんでいるのを発見する、という事件も数年に一度は見かける。何故かわからないと夫は決まつて言う。妻の心の苦しみを、理由は何であれ考えるといたたまれない。まつたく意識のないままの行為であれば、本人も周囲のものもどれほど気が休まるだろう。

最近のケースでよくあるのが、シングルマザーの同棲中の男の幼児虐待である。男との間にできた乳児に乳をやる女は疲れ切っている。日々の雑事の合間の二人の喧嘩も絶えない。男の少ない収入の割には酒や賭け事が多い。上の子供が授乳中の母親にまとりつく。淋しくて我儘を言う。自分もかまつてもらいたい。疲れた母親はそれを足で押しつける。子は

泣き叫ぶ。酒に酔つた男はうるさいと言つて幼児を殴る、煙草の火を押し付ける、風呂に閉じ込める、または洋服箱に閉じ込める。女は止めさせようとしない。男がさらに怒るのを怖れる。また去つて行かれても困る。幼児の叩かれた頭はぶよぶよで、煙草の火の跡は消えない、化膿する。どうしようもないのだ。幼児の息は途絶える。

男の罪の追及もさることながら、どの場合にも私は女性の苦しみを想像すると堪えられない。女性は深い懐をもつているが、繊細な心が無抵抗のまま苦しみに苛まれる時は弱い。しかしそれ以上に虐待され苦しめられ殺される幼児のことを考えると、いたたまれない。虐待され痛めつけられ、あるいは無視されても幼児は母親のところへすがりつく。邪険にされ疎んじ蹴られても、幼児にはそこしか頼るところはない。たとえ死しか待つていないとわかつていても、泣きながらそこしか行くところは無いのだ。

前に述べた乳幼児殺しと、子供虐待の果て死に至らしめるのはその性質はちがう。どれもそれぞれに異なるいたましさがあるが、共通点もある。当たり前のことではあるが、幼児はどれも死を知らず、死の恐怖の感覚を知らぬまま死んでいくということである。自分の命が何であるか知らぬままそれを奪われるのだ。生きていることを誰も認めないように、命の権利がまるで存在しないかのように。幼児たちはただ苦痛を味わうために生まれしてきた。そして存在の証明である苦痛さえも後には存在しない。生まれ出た自分の命を感じず、

その意味も意識せず知らずに死んでいくことをどう考えるべきか、私にはわからない。命の意味とは何か。幼児たちは生き続けたいと願って、それがかなわずに死んでいくのか。それとも生きることも死ぬことも何も望まなかったのだとしたら。私は答えない、解決してもどうにもならない問題が脳裏にふと起こって来るとその都度しばらく悩むのだった。

今回私が当番弁護士として任に当たったのは、このどちらともつかない案件だった。単なる過失事故であったともいえるが、やや奇妙な事件だった。

男は五十五歳。実子の乳幼児を死なせた。警備会社社員でその日は夜勤から帰って来たばかりだった。郊外にあるショッピングモールの警備が仕事で、規則上年間通して防弾チョッキを身に着けなければならない。空調のきいた車でも部屋でも夏は耐えられない。緊急事態や事件は滅多に起こらないが、その何もない日々を保つのが仕事である。日々の報告書は無駄と思われるほどのチェックと確認ばかりである。警備員の仕事への熱意と向上心は必要ない。平穏な時間を続けさせるのが任務と言っても、事件を待っているのではない、目的のない時間を眠らずに過ごすことは、たとえ前日に十分な睡眠をとったとしても苦痛に近い。

その日は朝九時に帰宅した。それから、ビールの大缶を一気に飲んで眠ることは最高の飲みである。入れ替わりに同居の女がパートの仕事に出かける。横になる。制服と防弾チョッキに締め付けられていた体は解放されもう眠っている。意

識はまだかすかに眠りに入っていく感覚を味わっている。一歳の子供が泣き出す。ミルクは十分なはずだ。おむつも替えただけのはずだ。古いクーラーの風は生暖かくかえって苛立つ。朝なのにもう蚊が耳元でうるさい。眼底から脳までの器官が軋り痛くなる。

男は子煩悩だった。女はすでに四十歳だったが、妊娠を告げた時男が喜ぶのを見てまんざらではなかった。愛し合った仲ではなかったが、子供を産むと決めた時から二人は一緒に住み始めた。女は甘い夢を少しは見たと、しばらくして後悔したが後戻りはできなかった。男の抱えている手を触れてはいけない闇のようなものが性格の奥にあるのがわかった。しかし過ぎていくにまかせる日々を断ち切るまでではなかった。

男は裸の胸に幼児を抱いた。柔らかな体から甘い匂いがした。いとしくて仕方がなかった。それが自分の肉体と別の物体であることが実感としてわかなかった。食べたいほど可愛い、というフランス語の表現を思い出した。男は温かい幼児の頭に唇を付けた。幼児は泣き止んでいた。それから男は心地よい眠りに落ちた。

女が帰ってきた時も男は熟睡していた。幼児の息は耐えていた。

医者や警察官は、茫然として痴呆のようになった男と、取り乱すことのない女の二人に異様なものを感じた。男は取り調べに素直に応じた。小さな葬式と何回かの取り調べの後女は連絡を絶った。

虐待の跡はなかったし、私の仕事はすぐに終わりそうだった。過失致死で送検されるだけだろう。

ただ私にはそれ以上の興味が残っていた。一見何の変哲もない風貌だが私の記憶に残る気になるなにかと、彼の変わった名前からも、しばらく彼と話をしたかった。体はそれほど大きくはないが、骨格はしっかりと動作も落ち着いている。短髪で色白の顔は整っている。ただ細い眼は何を考えているかを相手にまったく悟らせないほど動かず、それが意識してそうしていないのだけがわかる。相手を疑っているのでも拒否しているのでもないのがわかるだけ異様に光る。老境にさしかかった五十五歳にしては所帯臭さや人生の疲れは見せないが、力強さは感じさせない。ただ存在しているという雰囲気だけが、やや不気味にも感じられる。

高等学校在学中に母親が入院した。一人になり身寄りはないが父親の蓄えがあつた。卒業後は自衛隊に入り、それから二十年あまりを過ごした。規則正しい生活と訓練に彼は満足だった。訓練は厳しく苦しいほど彼の体は心地よく受け入れた。何か所も異動した。親しい友人はできなかった。同僚とのいさかいや上司のいじめも気にはならなかった。自分をそう正当化しようという気がなかった。雑事、まわりのことはすべて雑事と思われて何でも受け入れてしまえば気になる事はなかった。

毎年の演習にも加わった。実弾の爆発音も慣れれば気持ちは高揚しなくなつた。

地震、洪水、山崩れなどの災害復旧作業が主な仕事になつた。家屋の下敷きになつて原形をとどめていない血まみれの死体を運んだ。泥に埋まり見分けのつかない死体の顔を丁寧に洗つた。二次災害も怖れなかった。作業が過酷であればあるだけ力が入つた。

گران高原へPKO部隊で派遣されたのは一つの転機だった。期間中の規律はより厳しかった。危険がすぐ傍にあつたそれは気持ちのよい緊張の日々だった。物資の移送、高原の除雪作業、道路の補修工事が主だった。日本とは違う環境での作業は相当に体力を消耗したが苦にはならなかった。過酷なだけ身体には心地よかつた。休日には小さな冒険もした。異国の酒と女も知つた。フランス語も少し覚えた。

一度水にあたつて寝込んだ時は辛かつた。一週間も動くことが出来なかつた。繰り返される下痢に気持ちも力も萎えた。空っぽの胃の痙攣は涙も絞り出した。生きているのが嫌だと思つた。自分の身体が道路に転がっている物体や腐れかけた板切れに思われた。このまま意識を失つて死んで行ければ、と何度も願つた。周りにいる者たちもすぐに自分を忘れるだろう。自分の命の存在に意味がないのを初めて感じた。

関係国の政治的な駆け引きで、危険が増したとの日本政府の判断で撤収は早かつた。体が回復してからすぐのことだった。帰りたくなかつた。空や土の色、風のそよぎ太陽の光、美しい異国の女、それらが肉体労働の快感でさえあつた苦しさとともに懐かしい印象に残つた。

国際交流でフランス陸軍に二年ほど在籍した佐官が帰つて

きた。帰国記念講演で彼は自衛隊とフランス軍の比較を話した。海軍だけの戦いなら圧倒的に日本が強い。陸軍は装備の違いが大きすぎて日本はまったくかなわない。空軍はややフランスが上か、微妙なところだと。

そして外人部隊の話に男は興味を持った。それはフランスの若者の犠牲を少なくするための軍である。本国にとつて重要ではない戦闘に参加させる。総勢八千名あまり、現在は百三十か国の人間が在籍している。優秀なのは韓国人、ブラジル人、不適格はアメリカ、英国、中国人。現在日本人は二名ほどいる。給与、年金は当然だが、五年契約の後フランス国籍も取得できる。契約の延長は可能である。よほどの犯罪者でないかぎり、昔はその溜まり場であつたが、四十歳未満で体力があれば誰でも入隊できる。入隊のテストは簡単でその時に名前を変えることもできる。一度入ると規律と訓練は厳しい。時折り脱走する者もいる。日本人で過去に一度逃げ帰つた者がいる。昔と違つて今は彼らを搜索することは無い。四十歳まで十分に間のあつた男は自衛隊を退職してフランスへ向かつた。入隊は簡単だつた。規律も銃器の取り扱い点検も実践訓練も彼には物足りなかつた。同僚たちは何のこだわりもなく、だ五年を勤め上げ金を稼いで帰るのが目的で、休日に精一杯騒ぐのだけが楽しみだつた。宿舎の異様な匂いにもすぐ慣れた。当然ながら下士官以外にフランス人はいなかつたが、折に触れてフランス語は学ぶことはできた。

一度だけ旧植民地国のゲリラ掃討に駆り出された。山岳地帯をゲリラを追い詰めて前哨基地をつくるのが目的だつた。

戦闘よりも山岳の方が険しかつた。ただ弾はふいに飛んできた。傍にいた同僚が三人死んだ。一人は顔の真ん中に銃弾を受けた。顔は破壊された。男は哀れさも悲しみも感じなかつた。自分がすぐそうなるかもしれないという実感もなかつた。ただ淡々とことを処理した。

五年が過ぎて契約を更新した。他に行くところはなかつた。何か所かの駐留地を移動したが、つぎの五年は何もなかつた。物足りなかつた。訓練も慣れると一日の雑事の一つになつた。もつと激しい組織、厳しい軍律が個人を抹殺するほどの力で支配してくるのを欲した。己をその中に埋没させたかつたが日々は空虚だつた。荒れ狂う熱狂の中に流され自分を失つていくことが希望だつた。緊張と刺激のみならずそれは快感であるはずだつた。

思い出すと砂漠の訓練の苦しさが懐かしい。一步ごとに崩れる砂を踏みしめて倒れるほど歩く。灼熱の太陽は容赦ない。苦しさを感じないために、一步ごとの砂の音を聞く。何も得る物はないだろう。この音に己の人生の意味はないだろう。喉の渇きが己の身体を感じさせてくれる。肉体の疲労と痛みがその存在を感じさせてくれる。この時間が永遠に続くとしても、ただ空しく歩くだけだ。

しかし結果としてワインと肉で体重が増えただけの五年間だつた。

帰国した時は四十歳も半ばを過ぎていた。母親は死んでいった。仕事は警備会社ですぐに受け入れてくれた。交代制の昼夜が逆転した不規則な生活にはなかなか慣れなかつた。

町のフランス語学校に通つたのは単なる暇つぶしだった。経歴を話すとき珍しがられた。一人の女と知り合つたのはそんな時だった。

男は比較的私には心を開いてくれたようだ。親子ほどの年の差はないが兄弟にしては離れすぎている。今まで話をゆくり聴いてくれる者があまりいなかったのだろう。

事件については、偶然の出来事で辛いだろうが済んだことは仕方がない。時間が解決するのを待つしかない。罪は殺意があつたわけではないから、過失致死罪で軽く済むだろう、と私は言った。

その時の彼の答に私は眩暈を覚えた。考えようとする頭が真つ白になった。ただわかるような気がしたのは何かの錯覚だったはずだ。彼は言った。

「いや、殺意はあつたような気がします。いやありません」
あわてて私は彼を説得した。おどおどしながらまくし立てたようだ。

「それは気が動転しているからそう思うだけで、そんなはずはない。君はわが子をとでも愛していた。罪の意識がそう思わせるのだ。長い君の無為の人生が、その疲れがそう思わせるのだ。自分をそう追いつめるものではない。自らをそんなに貶めてはいけない。素直に自分を見つめるのだ。いいね、過失致死で僕は当局と話をつけるからね」

彼はもう私の眼を見なかつた。そして黙ってしまった。私は彼に私に眼を向けるように何度も言った。彼は頑なだった。

そして私は言うまいと決めていたあることを、抑えきれずについ喋つてしまった。
「たぶん間違いないと思うけれど、僕は五十年前の君を知っている」

その翌日私は担当弁護士を罷免された。

「二」

男の名前は芽比須徹、めひす・とおる。この滅多に聞かれない名前が私の記憶をすぐ呼び戻すのに時間はかからなかつた。事件の結末が幾分消化不良だつたせいもあつたのだろう、長い時間の経つたあとでも印象が燻のように残つていたので。

五十年ほど前、弁護士になりたての私は先輩の長尾弁護士事務所所属していた。彼は人権派弁護士とし立派な仕事をしていた。温厚な人柄で他人の話をゆくり聴いてくれる、というのが一番の評判だつた。彼に話を聴いてもらうだけで、訴える人の悩みが半分は解決されるという人もいた。司法修習生の頃、その授業を聞いて感動した私は彼の事務所です仕事をしたいと願ひした。将来は私もそのような人格者になりたいと思つた。最初の仕事は先輩弁護士の補助ではあつた。私は張り切つていたが、その力の及ばないことが現実にはいくらでもあるということを最初に教えてくれた出来事だつた。

芽比須徹の父は市内のはずれで小さな産婦人科の医院を開いていた。人のいい性格で何かを頼まれると断りきれない優しさがあつた。あまり裕福でない人が多い地域だつた。看護婦である徹の母とほかに看護婦が二人、事務職、賄が一人という小さなものだつた。自宅で産婆さんが出産に立ち会つのも多かつた。

その頃の日本は工業近代化で成長を謳歌し始めた時代ではあつたが、その被害の有害物質ダイオキシンの死産児や薬害の嬰兒がしばしば話題になつた。

芽比須医院で、腕のない薬害の嬰兒が生まれたのはまさにその渦中にあつた。誕生後すぐに嬰兒は死んだ。院長は事務処理を淡々としたが変な噂がすぐに流れた。極秘裏に、そのころはそう呼んでいた畸形児を、院長が頼まれて処理した。看護婦の一人か事務員かあるいはその若夫婦が漏らしたのか分らない。

警察は動いたが確たる証拠はなかつた。若夫婦は最初は自分たちが嬰兒の口を塞いで、あとは院長にお願いしたと言つた。自分たちは貧しく将来もどうしていいかわからない。院長はただ死亡証明の手続きをしただけだと言つた。だが何度もの調べで、夫婦は最初から院長にすべてを頼んだと主張を変えた。繰り返された無意味なやり取りのあと、院長が罪を認めた。実行者が誰であれ責任は自分だと。

なにが真実であつたかどうかはわからない。マスコミがラジオ、新聞で取り上げ、医院は連日報道員に取り囲まれ、院長はインタビューを強要された。

人権派グループが医院の前で糾弾のデモをした。鬼畜、ヒットラーと彼らは罵倒した。投げられた石で医院の窓ガラスが割れた。見知らぬ男たちの泥靴で医院は荒らされ、憔悴した院長は両腕を抱えられて連れて行かれた。何度も調書を取られて送検されたが、彼はもう何もしゃべらなくなつた。

反面、その子を生かせて、苦難の道を歩ませ、若夫婦に苦しい日々を送らせて、誰が喜ぶのか、誰が悲しむのか、という論調さえ出てきた。そんな中、憔悴した院長は自死した。それでこの件は終わった。徹がまだ五歳の頃だつた。

先輩の長尾弁護士は取って院長の弁護を買って出ていた。その意味が分からないわけではない。しかし私は自分の考えをまとめきれないまま長い無力感に陥ってしまった。

五歳と言えば、幼児を抜け出し男の兆しを見せ始めるころである。生命力ものぞきはじめ、ふてぶてしさも見え隠れする。私は先輩とともに院長宅で打ち合わせの折に、徹少年の相手もした。しかし私は手を焼いたというか、相手する方法がわからないというか、手こずってしまった。彼は感情をあまり出さず、こちらの問いかけにもはっきりした反応は見せなかつた。丸坊主が似合う丸顔の色白の整つた上品な顔立ちではあつたが、私には一瞬、能面に見えた事さえあつた。

母親は小柄で美人だつた。院長よりかなり若かつた。濃い眉毛と意志の強そうな眼が、こじんまりと顔の中心を纏めていた。口紅は真っ赤だつたが不釣り合いでもなかつた。私は初めて香水の匂いを知つた。

あれから五十年経ったのだ。今私はかつて先輩の長尾弁護士が使っていた机に座っている。仕事を始めて二十年経って独立しようとした時、長尾先輩が急逝した。そのまま事務所を受け継いでまた三十年経ったのだ。私は結婚したが子供はできなかった。平穩と言えば平穩な人生だった。向上心が無いわけでもないが、欲や希求心の強い性格ではなかったと思う。しかし激しい何かの情熱の奔流に巻き込まれて、自己を失うほどの時代を送ってみたかったと時折り思うのは自然だろう。そこで破壊された自己はどんな自分であつたらうか。今はあと数年もすれば私も妻も老いてどこかで一生を終えると思うだけだ。

今日は特に蒸し暑い。古いビルの事務所なので、セントラル制御のエアコンはあまり効かない。かと言って、新しいエアコンを取り付ける気もない。二人の司法書士も慣れているせいか文句を言わない。ある時から事務所を禁煙にしたがまだ名残の匂いは残っている。事務所の天井の照明は入れ替えて少しは明るくしなければならぬだろう。二人が帰って来らずいぶん経つのもう九時は過ぎただろう。雷が鳴って雨が降り出した。

私を罷免した芽比須徹の気持ちはわかる。当時まだ五歳だったとしても事件のことは後で知つただろうし、一家の不幸を今更突然他人がぶり返そうとすれば、拒否するのは当然だ。しかし私の出現が彼の心の底の何をどんなふうに着き上からせたかは、今度はこちらが知りたくなる。

彼の顔の白い皮膚が気になる。外人部隊では相当に日焼けしただろうにその白さは不自然だ。いくつもの死体を冷静に見つめて現実を知ると表情の色が失せるのか。私に向かつてしゃべり続けても、ふと目の前の空間に気を取られ、意識を失つたように黙り込むのは何かのトラウマか、それとも嫌悪すべき記憶のせいか。それとも白熱する砂漠の太陽と砂嵐の熱狂に取り残された、孤独と不安の再生なのか。

そしてなぜ彼はその殺意を否定しなかったのか。悔悟の余りの罪で自分を罰したいのだろうか。夢の中の譚言のように彼は言つたように思う。殺意はありました。私にはそれが彼がいかに幼児を愛していたかという表現に思われたのが不思議だった。

この件はこれで終わりにすることはできるが、そのままでは消化不良がいつまでも後を引くにちがひなかった。五十年前の資料を捲つてみることはすぐに思いついた。先輩弁護士の後を継いだと言いながら、その資料の整理は最初の頃はやっていたがだんだん面倒になり、ある時期から倉庫の隅にまとめただけで手を付け無くなっていた。私は夕立が止むまでと思いつながら、倉庫の資料に手を付けて探し始めた。わからなければ明日から所員にさせよう。しかし倉庫の照明は暗く、私は背後から芽比須徹の影が見つめているような気がして気が悪くなつてやめてしまった。

一週間ほど経つて所員が見つつけてくれた裁判資料に挟まっ

て紙束があつた。それは私に奇妙な衝撃を与えた。内容について私はどんなふうと考えていいのか分らない。否定も肯定もできない。ただ、真実を知り、ああそうかと思うだけである。しかしその力は強い。それは私の思考力を奪うほど強力だつた。

芽比須院長の死後十年余り、長尾弁護士が残された二人の後見をしていたというのを初めて知つた。少年から青年に向かう多感な時期を徹は折に触れて長尾弁護士に手紙のような手記を送っている。前後のまともにもなく、書きなぐられただけの手記である。長尾弁護士は意見を言わず、ただ彼の気持ちを知っている。徹もただ書き綴るだけだ。そこで意見とか忠告を与えられればそれは終わつただろう。手記が明るいうちに晒されるのは絶対に避けるべきことだつた。高等学校を卒業したところで手記は終わつている。自衛隊の入隊も、精神を病んでいた母親の入院手続きも長尾弁護士の世話だつた。

長尾弁護士もこれらの手記は自分の早い死を知っていたら破棄したのではないか、という疑問が私には残つた。

長い間閉じ込められていた紙は変色して焦げ茶色になつていた。湿つていても数年もすると完全に鉛筆の跡は消えてなくなるだろう。注意しながら紙束をめくると、私にはある種の愛着がわいてきた。

私は抑えがたい欲求を放置することが出来なくなつた。この数枚のばらばらに書きなぐられた手記、私の知らない世界、

隠された世界、淫靡な世界を、そのままほおつておくことに耐えられなくなつた。

私はこの手記を秘かに少しずつまとめることにした。書かれたことに空々しさを感じたこともあつたし、嫌悪感を催すこともあつた。しかし私を引き付けたのはなんだつたのだろう。私は芽比須徹になりきつて一人称で書くことにした。

「三」

父が死んだのは僕が五歳の時だつた。もう十年以上前になる。生前の父の記憶は薄い。白衣の小柄な後姿がぼんやり残っている。板張りの医院の廊下を力なく歩いて行く姿だ。死顔は蠅人形のように整っていたが、それが父であるかどうか確かではないが、それだけが印象にある。髭が伸びていた。その白さのため別人にも思われたが、生前の顔は浮かんでこない。

しばらくの父の不在は、五歳の僕には何を考えることも、心配することもなかつた。ある日父の死の知らせが届き、僕は母と夜汽車に乗つて出かけた。行先は北陸の知らない寒村だつた。スチームのきいた車内は暑く、それが妙に懐かしく僕は嬉しかった。秘密の会合に参加するような気がしていた。母も父の死を確かめに行く旅にしては、悲しそうではなかつた。今考えると父の死を二人で楽しんでいたようで変な気がする。

その朝、みぞれの降るぬかるみの道を長い間歩いて、病院か、警察かの建物に入った。死体の確認はあつけないほど簡単に終わった。布がとられると母はすぐそれを父だと認め、さつさと部屋を出ようとした。その場に泣き崩れる母を期待していた係員は、唾然と見送った。

僕は何を感じることもなく、ミイラもこんなに白いのかと思つた。

小山の中腹にある野菜畑の小屋で父は首を吊っていたらしい。僕らはそこへ出かけた。粗末な小屋で農機具が収まっている。壁の隙間から光が射し込んでいる、父の最後の空間。外は枯れた野菜がそのまま裸の土だけだった。広くはない畑。父がなぜここに来たかは謎だった。まったく関係のない土地で身元不明として処理されたかつたのかもしれない。冬の曇つた空に寒風が吹き抜けていた。その先に海が見えた。妙な解放感があつた。

医院はそのままの形で朽ちていった。壁のペンキは剥げ、紙切れのように飛んで行った。消毒液の匂いも蒸発し割れたガラス窓から流れ出て次第に消えて行った。風の強い日は残っている窓ガラスや瓦が落ちて割れる音がひびいた。医療器材を残したまま廃屋となつていったがどうすることもできなかった。

僕と母は母屋に住んで、ずっと雨戸を閉じたまま生活していた。誰かに見つめられているという心配はなかつた。外部からの侵入を怖れているのでもなかつた。むしろ僕らが外を

見るのを怖れているのではなかつたか。部屋は湿っていたがそれは僕たちに安心感をもたらした。

近所付き合いはなく、誰も見向きもしなくなつた。というより僕らとの接触を自然な格好で避けようとしていたに過ぎない。母は平気な顔で買い物に出かけ、一言も誰とも言葉を交わさずに帰つてきた。

少年時代をずっとその状態で過ごしたのだった。僕は自閉症と思われていただろう。あるいは気味悪がられていたかもしれない。僕らのことを知らない隣人はいなくなつたから。誰も近づかないし、悪童たちのいじめもなかつた。夜は二人でラジオを聴き少し笑つたりした。そして毎晩母に抱かれて眠つた。

平穏な日々の流れでは、少しずつ変化をもたらす狂気はなかなかその色合いを見せない。日常の雑事をいつも通りにこなしても、母はだんだん寡黙になつていった。そして僕をじつと見つめていても、その眼球に僕が映っていないかのように瞬きもしなくなつた。買物に出かける時は薄く化粧をしていたが眼の下の隈は隠せなかつた。髪が乱れ始めた。ふと、昨晚お父さんが帰つて来たのに、どこへ行つたのかしらと母が言つても僕は驚かなかつた。母はすぐに気がつき恥ずかしそうに知らぬふりして否定はした。

時間は停滞していた。不登校が続くと教師が訪ねてきた。母は明るく普通通りに対応した。僕はしばらく通うとまた休み、その都度教師は再訪した。彼の眼の奥に、奇妙な家族を

はしなかつたが、寝物語の背景になつて続いたのだ。

暗い波間に漂つた左右不均衡な母の顔がぼんやりこちらを見てゐる。時々夜光虫のように光る。僕は闇の中を浮遊しはじめ。はるか彼方にくつもの原色の灯がきらめきそれはひどく猥雑なものを想像させる。僕はその方向へ泳いで行くこととするが体は動かない。重苦しいものに押さえつけられて不安だ。鼓膜が圧迫されて破れそうだ。僕らは幼児をどんな方法で殺害するかということ話を話してゐた。ただ何を喋つてゐるのかわからず、声は聞こえなかつた。

闇の中に黄色の薄明るい霧が浮かび上がつてくる。無数の小さなうめき声が長く続く。しかしそれはむしろ祈りのようだ。苦しみはもう通り越してしまつて静かだ。沢山の裸の死体が折り重なつて倒れてゐる。親に抱きかかえられた幼児たちの表情は安らかだ。僕は冷たいコンクリートの壁に押し付けられてゐるが、苦しくはなく、まだ死につつあるということを知らない。僕は風呂に入つたためにと大人たちに優しく微笑まれてこの部屋へ入つたのだつた。あとで収容所の大広間で楽しい食事が始まるはずだつた。大人たちに愛された僕はお菓子を買つて笑うはずだつた。と、突然僕らの死体の群れの間一条の光が射しこんでくる。重い鉄の扉が開いて、誰かがそこから覗いてゐるのに気付く。光を背景にして立つてゐるのは女の姿だ。深くかぶつた鉄カブトの中の顔を僕はじつと見つめる。それは懐かしい母の顔だ。長い間、僕を見守り続けたあの狂気の顔だ。

その時僕は闇の遠くから、群集のざわめきが風に乗つて近寄つて来るのを感じた。それは明け方、幻聴で目覚める時に感じるある種の懐かしさを含んでゐた。僕はあわてて起き上がろうとした。しかし力がなかつた。さあ、早く行かねば遅れるぞ。この湿つた家から早く出て行かねばならない。今しも朝の巨大な太陽は白つぼい空に燦然と輝き始めようとしてゐるに違ひない。瞬く間に真つ青な空を焼き焦がさんとするだろう。群集は熱狂してゐた。今や、群集が長い間待ち望んでゐた征服者が出現したのだ。汗と脂肪でぎらぎら輝く彫の深い顔の征服者は群集の前に立つた。彼は真つ赤な太陽を背にして演説した。彼の漆黒の軍服はまばゆいばかりに煌めいた。群集は狂気の叫びをあげて、彼を賛美し、我先にと投げキスを送つた。群集は戦いに出て行こうとしてゐた。彼らは戦いと破壊を愛した。征服者は叫ぶ、死よ、万歳。歓声がさらに大きく湧き上がり、祝福の紙吹雪が真つ青な空からとめどなく彼の頭上へ舞う。

完